

英国で生まれた「ジェントルマン」という思想は
いかに進化を遂げてきたのか？

21世紀の「紳士」概論

だれもがわかっているようで、実はだれもわかっていないのが、「ジェントルマン」という言葉が持つ本来の意味。ここでは服飾史家の中野香織氏が、そのルーツと進化の道程、そして日本では北村三郎が「メンディ」という概念との区別にいたるまで、懇切丁寧に解き明かしてくれた。現代を生きる紳士、必読の書である。

著 中野香織（服飾史家）

撮影／宮岡幸子（P.54～55、78～79）、七木友彦（P.62） コーディネーター／森 高利（P.58～61）
コーディネート／大塚美穂（P.70） レイアウト／武蔵一騎デザイン室（P.64）/山下美奈（P.68）

英国のTVドラマ「ダウントン・アビー」の撮影地にもなった、英国貴族カーナボーン伯爵家の大邸宅「ハイクレア城」。その敷地はなんと、東京ドームの約430倍もあるという。かつての支配階級が所有した巨大な家と、それを潤物とするための奴隷から、ジェントルマンという概念は生まれてきたのだ。

ジ

ェントルマンとは、女にも
の女のか？

ジェントルマン、と男性

用「イレのドアにも書かれている。

「女性」と区別して「男性」

「ジェントルマン」に使う、便利な言葉でも

「ジェントルマン」は、

純粋存在ではない、ということ、
ジェントルマンの最も強みでもあつ
たのである。時代に応じて、状況に
応じて、人々はこの言葉に好き勝手
な意味をこめてきた。自分や自分の
息子を除外しないような意味を、

したがって、ジェントルマンと時

は、各時代の歴史をたどっていく

と、各時代が夢見た男性像のバリエ

ーションが出てくるのである。

とはいえ、原型として時代を超え

て語り継がれる理想像はある。たと

えば、16世紀「貴族と騎士の華」

として語り継がれる完璧なるジェン

トルマンのひとりに、サー・フィッ

ップ・シドニー（1554-1585）が

いる。

廷臣の風にして学者、詩人にして

音楽家、恋を知る軍人でもある。馬

術、武藝の権威、学問、音楽を日課

として通す彼は、名譽のために行

動し、人の悪口を言わず、陰謀を企

てることもなければ、おもむくこと

もない。

数々のシドニー伝説のなかで、最

も引用されることが多いのが、15

86年、ズーフエンにおけるスベ

イン連隊との討戦のエピソードであ

る。敵側の指揮官がすね当てをつけ

ているのを見て、フェアに戦おう

と自告すすぬ当てをとりはずしてし

まったために、シドニーは致命傷を

負う。潮光のシドニーは飲み水を求

め、水筒を口にあてが初うとするが、
そのとき、ひどく負傷した兵卒が運
ばれてきた。兵士が恨めしげに水筒
を見て、口を刺す。シドニーは

水筒を口で手渡すのである。「そな

たの必要が私のそれよりずっと大

い」と。

はじめて国葬されたイギリス人

でもあつたシドニーは、このエピソード

によつて「ジェントルマンの風」

とされた。公正さと思ひやりも正義

感もないリーダーが模倣する現代社

界に、サー・フィリップ・シドニー

の亡霊が現れてくれないかと思うこ

とがある。

ジェントルマンは

土地・階級・教養・人品で

できている

そもそも、歴史学の分野でジェン

トルマンというとき、それは、不勞

所得のある大土地所有者をさすこと、

ここに聖職者や法学者、高級官僚な

ど高度な専門職従事者が加わり、イ

ギリスの支配層を形成し、保守主義

の文化を出てきたのである。

地主であるだけでジェントルマン

かといへばさうでもなくて、富と権

力を持つ者が野蠻だったら困るの

で、支配階級にふさわしい教養・人

品といったソフト面も重視された。

これを養うための教育機関、すなわ

ちイートン校を登場とするパブリッ



20世紀までの紳士とは……

- 不労所得のある大土地所有者
- 高度な専門職従事者
- バブリックスクール出身で、優れた教養と人格を持つ
- 一目でそれとわかる装いをしている

タスクタール、オクスブリッジ（オクスフォード大学）とケンブリッジ大学）は、ジェントルマン養成機関として今なおその権威を誇る。

このジェントルマンと非ジェントルマンの境界がどこか曖昧であるという特徴を持つ。曖昧であるからこそ、時代に応じて「ジェントルマンにふさわしい」条件を変えることで、支配体制を温存することができた。18世紀末の激動期、フランスでは階級の上昇可能性がなかったために流血革命が起きてしまったが、環境適応力に優れたジェントルマン制度という抑圧自在な階級制を持つイギリスでは、多くの男たちをジェントルマ

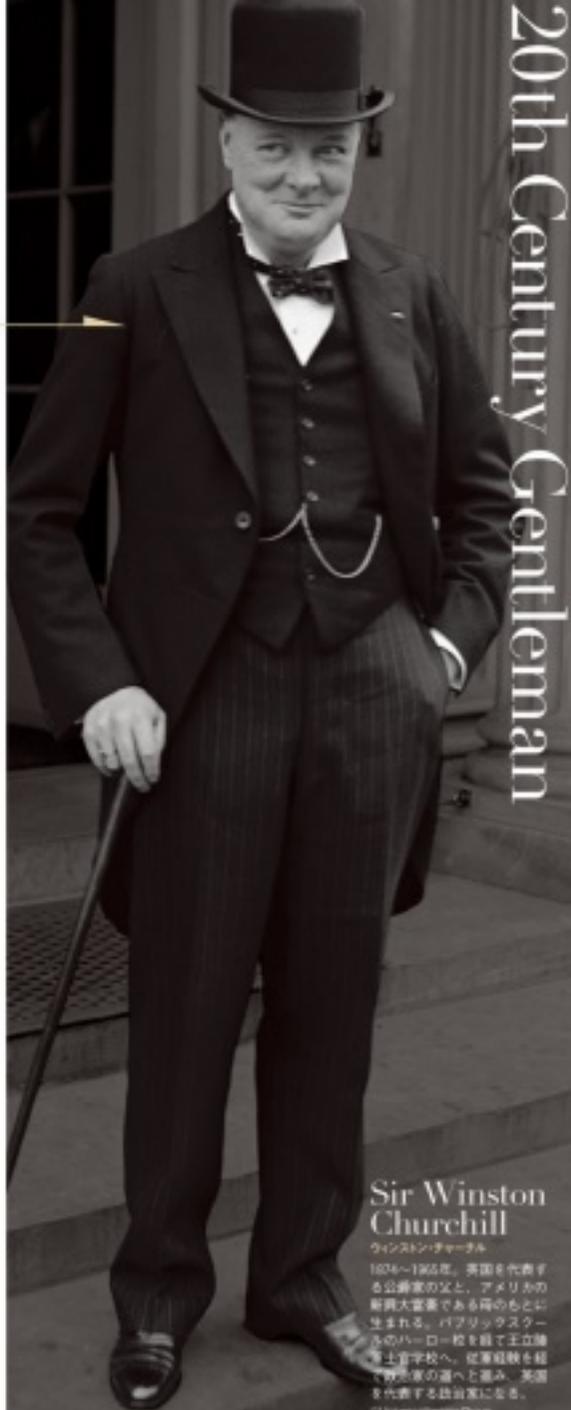
ン層にとり込むことによって、流血革命を避けることができたのである。

19世紀中頃には、産業革命によって資本を蓄えた中産階級が支配層に入り込み、ジェントルマンらしきも大きく増える。かつてのジェントルマンには、有閑階級ならではのデカダンでスノッパな部分もあったのだが、この頃になると中産階級特有の謙虚さや誠実さがジェントルマンらしきに加わっていく。それがイギリス帝国の植民地の拡大とともに世界に広まり、「スーツを着て指図する」ジェントルマン像が英語とともに普及していくことになる。

20世紀にはチャンスさえつかめば、だれでもジェントルマンになれるようにになった。

「ドラマ『ダウントン・アビー』では、お屋敷の運転手だったアイルランド出身のトム・ブランソンが「お屋敷のお嬢様シビルと階級越えの結婚をし、シビル亡きあとはお屋敷の土地の管理者になってちやっかきとジェントルマンの特権入りを果たしてしまっただが、原理原則主義ではなく、あのような階級越えを認める諦念というか、よくいえば愛と寛容に基づいた現実主義が、ジェントルマンの支配制度をかくも長く続かせてきた鍵である。

それにしても、トムの劇的な変貌を見てしみじみ思ったのは、男は、ジェントルマンとして扱われると、



Sir Winston Churchill

ウィンストンチャーチル

1874～1965年。英国を代表する公衆家の父と、アメリカの新興大富豪である母の間に生まれる。バブリックスクールのハーロー校を経て王立陸軍士官学校へ。従軍随員を経て政治家の道へと進む。英国を代表する政治家になる。

© Crown Copyright 2014

21世紀の紳士とは……

- 国籍や階級にとらわれない
- 必ずしもネクタイは必須ではない
- ジェントルマンを自称しない
- アンダーステイメントなユーモアと装いを操る

ジェントルマンらしくなっていくものだといいことである。

ジェントルマンは
ダンディを撲滅しようとしたことがある

さて、ここで確認しておきたいことがある。ジェントルマンとダンディは違うということである。

どちらもスーツを美しく着こなす男であり、イギリス文化に発する男性理念なので、同じように見えて紛らわしい。まあ、メンズファッションという面だけから見れば、ことさら両者を明確に区別する必要はないのかもしれない。

しかし、本来、両者は別々のカタ

ゴリーに属する種族であり、歴史のある階級においては、ジェントルマンによるダンディ撲滅キャンペーンまで行われていたことは忘れないでください。

ダンディズムが生まれたのは19世紀、その基本にあるのは、あくまで男の洒落音通である。精神的態度の問題に発展するとしても、それはどこかで美しと関わる。

それに対し、ジェントルマンシップの起源は、中世あるいはそれ以前にまでさかのぼる。統治者として、文化的リーダーとして、いやときにはひとりの男としての理想的なあり方に関わるのが、ジェントルマンシップである。したがって、ジェント

ルマン理念のほうは、装いばかりではなく、広く政治・経済や教育、戦争やスポーツにも関わってくる。

ジェントルマンシップという大木のひとりの小枝として、ダンディズムがある。

そのようにとらえていただけでもよいかもしれない。ジェントルマンシップはあくまで主眼であり、その伝統のなかでダンディズムという異端の小枝が生まれた。だから、小枝のダンディズムが育ちすぎるとき、本体たるジェントルマンシップをそごわてしまふような事態が生じることもある。

この事態を思いきり平たく言ってしまうと、こういうことだ。「お洒

21st Century Gentleman

David Gandy

モデル・俳優

1980年、英皇の父を討つ英国で最も栄枯したメンソファッションモデル、ピエール・スズツヤやウラジワカールといった、最高のジェントルマン文化のアンバサダー的存在。チャリティ活動にも熱心な21世紀のジェントルマン。

©Kevin Searles

英国紳士・カーナボン伯爵の紳士論

「騎士が生み出した英国紳士の原型。
広大な領地を守り、慈しむことで
本物の優しさは培われる」

Earl of Carnarvon

落にかまけすぎている男はジェントルマンではありえない」

前述の、ジェントルマンによるダンディ機械キャンペーンはまさにこれが理由であった。トマス・カーライルによる「衣服哲学」(1833-34)もこのキャンペーンの一環として書かれている。第三部第10章「ダンディ」という宗派」は「衣服を着るために生活する」ダンディを痛烈に攻撃した章でもある。

「参考までに、現代のイギリスで、美のたつもりで「ダンディです」と言おうものなら、多くの場合、不快な顔をされる。ダンディ(「イ」をやや高めに発音される)には、お酒好きで自己愛の強い男というイメージがあり、お洒落のアピールなど、恥ずかしいことだと思っている主流のジェントルマンにとって、そのように見られることは好ましくないのである。

ではいったいなぜ現代の日本で「ダンディイースーツ」を漬くかっこよく着こなす男)になってしまったのか? それは19世紀フランスのボードレールを筆頭とする、ダンディイズム(装束文学者、彼らの仕事を日本に持ち込んだ水戸黄門らの影響ゆえなのだが、この点に関する議論は本稿では省略する。

開かれた、
でもやはり排他的な
モダン・ジェントルマン

21世紀には「丁」を筆頭に新しい職種の人たち、いわゆるニューリッチがジェントルマン層に搾られる。海外



現在、ジェントルという言葉の意味は保しく思慮深い性格をさすが、その源流は中世の騎士道に通じる。そんな言葉も、由緒正しきカーナボム伯爵家の8代目には口にはされず、重さが違う。「騎士道は非常に英美的です。騎士には真のマナーが求められました。それが今の紳士の概念です」。

その昔、王、または女王に所領を与えられ、騎士には、領地と領民に対する責任が生まれた。伯爵は「その責任が紳士の根を結ぶにつくった」と言う。また伝統的な英国紳士の明瞭な生活を好み自然を愛するのち、騎士が領地と領民を守る過程で自然と人に対する深い思想と優しさを身につけた名残だという。

ロンドンから西に約100km、日本でも大ブレイクしたTVドラマ「ダウントン・アビー」の舞台となったハイタムアビー城がある。言わずと知れた華やかな住居だが、正徳は城を囲んだ500エーカーの大自然。なんと東京ドームが434個も収まる美しい湖の丘陵地帯である。「この歴史に住む素晴らしいは、四季とともに移り変わる自然の美しさを目の当たりにすることです」。本物の英国紳士は、こうしたいにしえの騎士の時代から受け継ぐ広大な自然のおかげで、今も存在し続けていた。



Profile

ジョージ・ハーバート 第10代カーナボム伯爵 1966年11月12日生まれ。エリザベス2世は女王陛下の王太子の元カノエリザベス2世。オックスフォード大学で学んだ後、カーナボム家の歴史を研究し、家父の7代目はエリザベス女王の侍従長を務めたこととして有名。伯爵の別荘ハイタムアビー城は、有名なテレビドラマ「ダウントン・アビー」の舞台にも登場され、世界遺産登録もされた。



の資本家も食いつ込んでくる。人種においても宗教においても多様性が広がり、ロンドン市長はパキスタン系イギリス人でイスラム教徒である。彼らは旧来のジェントルマン像を大きく変えているため、モダン・ジェントルマンとも呼ばれている。昔からのジェントルマン、いわゆるオールド・エスタブリッシュメントが表面上はオーブンに、内心では半分陰険しながら、謙虚や寛容をもって新参者を受け入れている様子は、19世紀とあまり変わらない。なんといつでも顔引きを凝視にすることの環境適応力こそジェントルマンのオスナナピリケイの礎なのだ。

20世紀には、スーツを着たジェントルマンは、労働者階級と異なる言葉を使ひ、一日でジェントルマンとわかる服装をしていたが、21世紀のモダン・ジェントルマンはそうではない。労働者階級の英語を話したり、あえて高級ではないスーツを着たりする。チャールズ皇太子はずっとビスポータを着てきたが、ウィリアム王子の結婚式には既製の「パタインオーダー」スーツを着用した。しかも、ターニングブル&アッサー、というシャツメーカリーのスーツを、ビスポータは抱きた、というのが理由らしい。ヘンリー王子も労働者階級のアクサセントで話し、自分の結婚披露宴のタキシードの着方すらいい加減だったらしい。金融街シテイでもビジネスのシーンなのにネクタイをつけない男性が増えている。装いや話し方に「ジェントルマンらしさ」を求めることは困難になりつつあるのだ。

イタリア紳士ミケーレ・ボナンさんの紳士論

「自身を育んだ環境や歴史への敬意が
紳士としての素養を磨く」

由 緒ある名家のもとに生まれ、古都フィレンツェで育った紳士、ミケーレ・ボナンさん。この地に古くから根付いた職人文化を深く愛し、笑みからインテリアまですべてビスポークで仕立てるといふ美意識高き彼は、「フィレンツェへの敬意と誇りが、私のアイデンティティの重要な部分を占めています」と語る。そんな彼が考える紳士像とは、「人としてのモラルや知性を大切にしながら、自身の感性に響く価値ある美しいものを尊重し、それらに囲まれ充実したライフスタイルを送っている男」だという。しかしそれは、必ずしも金銭的価値の高いモノだけを尊重するという意味ではない。「自らを育てた環境や歴史、そして人々への敬意を持つこと。そして、そんな日常を通して気づかぬうちに培われていく感性こそが、紳士としての素養を育てるのです。もちろん幸運な家庭に育った人なら、自然に紳士道の基本は備わるでしょう。しかしたとえ恵まれた環境になくとも、文化や教養への理解を深め、自分自身に挑戦しながら生きていけば、徐々に身につけていけるものだと思います」

Michele Bonan

Profile

1960年生まれ。フィレンツェ育ち。オーストリア・ハンガリー系貴族系ルーツに誇り自慢正しく洗練された、美しいものに囲まれて育つ。フィレンツェ大学建築学専攻卒業後、建築家の道に。「ルンガルフ・ホテル」を代表するホテルデザインに加え、世界各国のセレブリティたちの愛用の内装を手がける。今回撮影したフィレンツェの屋敷は、ルネサンス期のコルシーニ家の屋敷を自ら修復改装したものだ。

職業においても、ジェントルマン養成機関で教育を受けながらオスカーク様になるということまでありにっている。

「だいたい「あなたはジェントルマンですか」と聞いても、モダン・ジェントルマンは「ノー」と答えることが多い。「僕はジェントルマンじゃない」と言うほうがカッコいいと思っている節がある。ジェントルマン文化は観光資源として残るとしても、ジェントルマン制度が間かれないで意味をなさなくなっているのではと感じることがある。

いや、ところが、時代、この制度の隠れた特徴でもある排他主義が顔を出すのだ。

シテイでネクタイをつけないビジネススマンが増えているのは事実なのだが、2016年9月1日、BBCニュースは、シテイに就職しようとする労働者階級出身の若者が、直接に茶色の靴をはいていけば不採用になる可能性があるという報告書の内容を報道した。「ノー・ブラウン・イン・タウン（シテイではスーツに茶色い靴を合わせない）」という伝統的なジェントルマンの掟を知らないものは排除されるという文化がいまだ存在であることを世に知らしめることになった。

また、ジェントルマンの社交場であるクラブは20世紀までと比べるとずいぶん「開かれた」ことになっているが、それでも伝統を重視するクラブは、ある一定の厳格性を貫いている。

このように、開けられ、見えないう「ジェントルマンの壁」をくずすべく、ジェントルマンになるためのガイドブックの類が出版されているが、これらはむしろ強烈な皮肉がこめられた本として扱ったほうがよく、内容をそのままのみにすれば、彼らにざきりとやられる。それも、知性と教養でオブラートに包むみ、一見飾っている感じはしないけど痛烈という皮肉で、オスカーク・ワイルドは、「ジェントルマンは、無意識に人を傷つけることはない」という名言を残しているが、つまり、気に入らない輩は意識的に傷つけることはあるということだ。

ジェントルマンの世界は、オープンになったように見えて、実はクロイズドな世界であることに変わりない。本物には本物じらししかわかりえない秘儀的な約束事がある。核心は常に見えない。時折、ちらと暗示されるそうした排他主義は、実はジェントルマン文化の抜きたい魅力でもあるのだ。

モダン・ジェントルマン、変わるぬ「らしさ」

モダン・ジェントルマン像は多種多様に幅が広がったが、そんな時代にあっても、変わらぬジェントルマンらしさがあるとするれば、いったい何だろうか。3つ考えてみた。まずは、何があってもあまり感情ないし本心を見せず、静かに受け流す態度である。

戦時中に「落ち着いて、そのまま毎日を続けよう（Keep Cool and Carry On）」という標語が考案され、21世紀に復活しておみやげ品などにも使われているのだが、まさにその態度に普遍的なジェントルマンらしさがある。実は、この精神は17世紀から変わらず、清教徒革命の動乱のさなか、アイザック・ウォルトンが釣りの本「釣魚大全」を書いている。動乱の時代だからこそ心穏やかに釣りのことでも考えようじゃないかという、見方によってはかなりアナキーな姿勢の表れがこの名言である。

次に、アンダーステイメント、それとセットになったニューモアである。アンダーステイメントとは、ドラマティックなことを極めて控えめにさりげなく表現してみせること。そのさりげない表現自体が強烈なアイロニーとなつて、えもいわれぬおかしさがたらのびる。反対語はハイパーボル、誇張である。

このアンダーステイメントは、イギリスが誇る巨匠ヒッチコックが映画の技法として駆使したことでも知られる。大事件が起ころうと濃情にかられようと死体が転がっているように、あなたも日常であるかの調子で、騒ぎ立てることなく、興奮しすぎることもなく、さりげなく、制御を効かせれば効かせるほど、じわじわくる。

アンダーステイメントは、装いにおいても表現される。ひねりのあ

るジェントルマンスタイルで人気を誇るジェレミー・ハケット氏は、3年前に行ったトータクショーのなかで、ジェントルマンの装いに必要なことは何かという質問に、「気づかれないこと（Unnoticed）」と答えてくれた。ダンディズムの明ジョージ・ブライアン・ブランメルが、「通りを歩いていて振り向かれたら、君の装いは失値である」と語ったことと同じ。ブランメルは2時間半かけて「さりげない」ネットワークスを構築したが、モダン・ジェントルマンは、型にはまらず、そのときの気分に応じた形でポケットチーフを「さりげなく」挿す。型をたたき込まれているから型をくずせるといふ余裕があるところが心憎いのだが。

そして最後に、「わかりにくさ」これに尽きる。

どこまでが本心がわからない。どこで排他の線引きをしているのかわからない。さりげなさすぎて皮肉なのかニューモアなのか明瞭にはわからない。おそらくすべてに意図があるのだろうが、それはつい説明がされない。30のシェイドどころか100のシェイドもありそうな、明から暗までの、コントローラされたグラデーの魅力。それがあからさま、ジェントルマンは昔も今も、かくもブランド力を失わないのである。

PROFILE

著者のプロフィールとして歴史・時事・経済のなかで企業・経営者として活動。ケンブリッジ大学卒業後、明治大学に勤務。著書『BRANDS & TRADITIONS』